

私の一冊

社会福祉学科 中澤秀一 先生

工藤恒夫著 『資本制社会保障の一般理論』

小鹿図書館 : 364/Ku 17 (新日本出版社)

いまでこそ研究の専門領域は「社会保障論」であると言うことができるが、内心は忸怩たるものがあるというのが偽らざる心境でもある。というのも、「社会保障論」を研究するに至るまでが、「ひょうたんから駒」の連続であったからである。

そもそも大学院に進学しようとした理由は、いま思い返してみると「将来は研究者になるのだ」という確固たる信念があったわけでもなく、「もう少し学生生活を続けたい」という極めてモラトリアム的な発想から生じたものであった。時はバブル経済が弾ける、ほんの少し手前。大卒者の就職は売り手市場で、大したコネがなくても大手企業に楽々と就職できた頃である。理工系とは異なり、文系では大学院に進学すること自体が珍しかった時代だ。当時在籍していた静大人文学部には大学院が設置されていなかったのも、無理からぬことである。それでも、「物好き」な私はほんの軽い気持ちで他大学の大学院進学を決めた。

ゼミ担当の教授の三富先生(本学助教授の三富道子先生の御主人である)は、「大学院進学を目指すにはあまり成績がよろしくないね。」と心配されていたが、無謀にも4年生の夏から受験勉強を開始し、秋からの受験に備えた。結果はというと、他大学から受験というハンディがあったせいもあろうが、ことごとく受験は失敗であった。ところが、ありがたいことに中央大学だけは私に門戸を開いてくれて、めでたく進学できることとなった。

さて、大学院の修士課程で研究しようと思ったテーマは、「女子労働問題」であった。三富ゼミで労働問題について学び、とりわけ女子労働に興味を持った私は、大学院ではもっと深く学ぶことを希望した。修士課程では女子労働も専門であられる高島道枝先生の御指導のもとで多くのことを学ばせていただいた。それでも私は、修士課程修了後の進路として、一般企業への就職を考えていた。しかし、困ったことに修士課程在籍中にバブルは弾けてしまい、就職は困難になってしまう。このように退路(?)を絶たれる形で、将来は研究者を目指して博士課程へ進むことになったわけだが、私の不幸(?)はまだまだ終わらない。

大学の規定により博士課程では高島先生の指導を受けることが不可能となり、指導教授の変更を余儀なくされる。その指導教授こそが、今回の私の一冊の著者である工藤恒夫先生で

あった。工藤先生の専門は「社会保障論」なのであるが、私かというと社会保障には特に興味もなく、他のテーマで研究を続けていた。それでも、工藤ゼミに参加する中で、いつの間にか「社会保障とは何か」というものが自然に身についていたのかもしれない。まさに、「門前の小僧、習わぬ経を読む」というやつである。

その後、工藤ゼミの学生ということで「社会保障論」の講義の依頼を受けることが多くなり、専門学校や短大で教鞭をとるようになった。「教える」ということは、「学ぶ」ことの最短の道である。この頃は、毎日それこそ専門書や資料と格闘しながら、あるいは他の研究者らと意見を交わしながら、必死に社会保障について学び、ここで社会保障の重要性について目覚めるのである。それでも、この頃の私はまだまだ社会保障の研究者としては半人前であったに違いない。本当に独り立ちができたのは、工藤先生が御病気になり体力的に講義をすることが困難となり、先生の代わりに講義を担当することになってからだと思う。その時に、教科書として使用したのが本書である。本書の内容をできるだけ分かりやすく学生に伝えようと試行錯誤するなかで、私自身を成長させてきたのだ。先生は病気の御身体に鞭打ちながら執筆し、本書を完成させたものの、残念ながら御自身が講義に使うことなく一昨年に中央大学を退官された。

近年、社会保障構造改革という名の下、社会保障制度の改革が様々な分野で推し進められている。その改革とは、一言で言えば国民に負担＝「痛み」を強いるものである。人口減少社会の到来、高齢者人口の相対的増大と歯止めのかからない少子化、グローバル競争の激化等、われわれを取り巻く社会・経済は大きな変化を迎えていることは、紛れもない事実である。だからといって、それらの変化を国民の負担増という形で転嫁するのは重大な問題である。社会保障は、ある日当然に生まれたものでもなければ、誰かが急にこしらえたものでもない。資本主義体制において、自己責任＝「自助」が根本の生活原則であることは疑う余地はない。「自分の生活には自分で責任を持つ」。これを基本とするのが資本主義なのだ。けれども、資本主義が進行する過程において、個人之力だけではどうにもならない様々な問題が起こってくる。それらの諸問題を解決するためには、ひいては資本主義体制を維持するためには、社会(国家や企業)も国民の生活に対して責任を持つ必要があった。つまり、社会保障が誕生したことには歴史的な必然性があるのである。本書では、歴史的に社会保障の形成過程を分析するとともに、生存権保障の意義や社会保障のあり方についても考察している。初学者には少々難解ではあるが、「社会保障とは何か」について理解する上で、本書は恰好の書であろう。

本書に込められた「社会保障とは何か」というエッセンスは、現在も、そしてこれからも私の社会保障研究のバックボーンであり続けるだろう。